

第一回卒業生を送りだす

大正一五年一〇月、加賀野礮町に仮寄宿舎が設置され、舎生一五名を收容したのが本校寄宿舎の始まりである。昭和三年四月には、加賀野春木場に「積慶寮」が開設された。初期の積慶寮は元校長宅であった民家を改造したもので、寮生七名からの出発であった。寮則などはなく、寮生は自治的自律的に生活した。寮の評判はよく、開設一カ月もすると寮生がにわか増加した。こうなると共同生活の必要から合議によって寮則が定められ、起床、掃除、運動、食事、外出門限、自習、就寝のすべてが時間をもって示された。このため最初は窮屈を感じる者もあつたらしい。

義正翁は少年時代に親元を離れて生活した体験から、寄宿舎については格別の配慮を怠らなかつた。寮の忘年会や新年会にもよく出席したという。

昭和四年には「重暉寮」が新築開設され、積慶寮は改築されて舎監住宅・食堂も設けられた。引き続き昭和六年には「養正寮」が建設された。

重暉寮の新築当時、市内の下宿料は平均で一八円ぐらいであったが、寄宿舎費は一六円であった(昭和六年には一三円五〇銭となった)。

さて、本校草創期の数年間は、当然のことながら年を経るごとに学年数が増えていった。つまり大正一五年入学の第一回生がずっと最上級生だったわけで、その下級生が年々増加したのである。したがって一年生から五年生までが全部揃ったのが昭和五年度であった。そして翌昭和六年三月八日、ついに記念すべき第一回卒業生を送り出したのである。

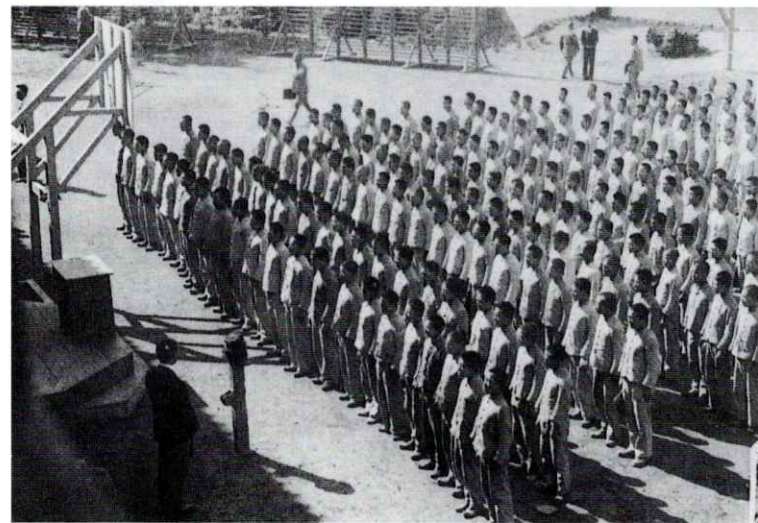
卒業式会場の講堂には、久保豊四郎岩手県知事や中村謙蔵盛岡市長をはじめ各界の名士四十二名が臨席、卒業生は九一名で、四九名の父母も列席した。定刻の午前一〇時に式が始まり、君が代二唱、教育勅語奉読、学事報告のあと、卒業生氏名点呼、卒業証書授与が厳肅に執り行なわれた。校長式辞、卒業生総代による答辞、来賓の祝辞がこれに続き、第一回の卒業式は滞りなく終了した。

中津川河畔の仮住まいの校舎から出発して五年、校旗、校歌の制定をみ、校地・校舎も我が所有となり、教師の陣容および諸施設も整って第一回卒業生を送りだした昭和六年の一〇月一五日、本校の開校式が挙行された。

ようやく校風の基礎が形成されつつあった我が岩手中学校は、本県私学の雄として、さらに発展への体制づくりを行なうべき段階にさしかかっていた。そのような時期に県と市の各界を代表する多数の来賓を迎え、盛大きわまる開校式を催して躍進の決意を内外に表明したのであ

る。

草創期の母校に学んだ先輩のなかにはすでに鬼籍に入られた方も少なくないが、八〇歳を過ぎてなお矍鑠(かくしゃく)とし、「生涯現役」の姿勢を貫かれる先輩、また立派に役目を果たした後の余裕の人生を楽しんでおられる先輩も多く健在である。今回、この記念誌のためにおふたりの大先輩より寄稿をいただいた。



全校生の屋外朝礼(昭和7年)